氏　　名　川桐信彦（かわぎり のぶひこ）
学位の種類　博　士（文　学）
学位記番号　文博第 312 号
学位授与の日付　平成 17 年 3 月 23 日
学位授与の要件　学位規則第 4 条第 1 項該当
研究科・専攻　文学研究科思想文化学専攻
学位論文題目　ティリッヒの芸術神学

論文調査委員　（主査）助教授 芦名定道　教授 片柳榮一　教授 岩城見一

論文内容の要旨

本論文の課題は，ティリッヒの芸術神学の解明を通して，新たな芸術神学を創造するための契機を見出すことである。ティリッヒによる時代の精神的状況分析においては，その直接的反映としての芸術，特に視覚芸術と文学とが手がかりとされているが，芸術は精神的状況の反映としてのみならず，ティリッヒの思想展開の源泉として働いている。つまり，ティリッヒにとって，芸術は議論の対象であるにとどまらず，彼の思想展開を支えるインスピレーションの源なのである。これは，ティリッヒの「文化の神学」や「信仰的現実主義」において確認できる。本論文では，以上のティリッヒの思想的特質を，「現実主義」「ブルジョア精神」「ロマン主義」などの基本的な諸概念の明確化を通して明らかにすることを目指す。

第一章「「文化の神学」と芸術をめぐる諸概念」では，芸術に関してティリッヒの芸術神学が用いる中心的な諸概念（内実，様式，意味，創造性など）が分析される。そのための基本テキストとなるのは，1923年の『諸学の体系』であるが，この文献において，ティリッヒは「芸術」「形而上学」「神律」「自律」などの諸概念を体系的に論じると共に，人間の精神性における芸術の位置を明らかにすることによって，宗教と文化の総合を試みている。その結論は以下の通りである。あらゆる精神的行為は，意味の行為であり，精神は意味の領域において創造的である。「宗教は無制約的な意味に向かう精神の志向性であり，文化は制約的な形式に向かう精神の志向性である」（広義の宗教概念）。

第二章「現代芸術の宗教性」では，第一章において明らかにされた芸術神学の洞察がティリッヒによって現代芸術にいかに適用されているかを論じる。この際にポイントとなるのは，ティリッヒの言う広義の宗教概念に他ならない。つまり，宗教とは人間の精神的生にとって本質的で不可欠の働きを担っており，いわば文化という平面（意味世界）を支える無制約的で究極的な深みと規定できる。これが，伝統的で制度的な諸宗教（狭義の宗教）に対比して広義の宗教と呼ばれるものであるが，芸術の宗教性を論じる上で重要なのは，この宗教を広義に捉える観点なのである。そこからピカソの≪ゲルニカ≫が「問い」を発する作品として最大のプロテスタント絵画であるというティリッヒの評価が発生する。表現主義的絵画の特質に関するティリッヒの独特な解釈や評価は，「文化の神学」を具体化したものと言える。

第三章「『大衆と精神』における芸術」では，ティリッヒの大衆論と芸術との関係が取り上げられる。『大衆と精神』で，ティリッヒは「大衆」や「人格」などの概念の具体化を絵画作品の中に発見しようとする。これは，絵画が言わば無言の教師であり，概念的用語よりはるかに明晰に本来の精神を説明・開示するという洞察に基づくものであるが，ティリッヒは，絵画において，大衆が描かれ，中心的人物像がその大衆との関係によって配置される絵画の様式から，絵画が描かれた時代精神とその下にある大衆のあり方とを解明しようと試みる。とくに，ティリッヒの大衆論の独自性は，「大衆」概念を類型化し，それによって大衆の宗教性（神聖性）を論じている点に認められる。

第四章「『現在の宗教的状況』と『世界状況』」では，1926年の『現在の宗教的状況』と1945年の『世界状況』に一貫して見られるティリッヒの状況論の思考方法，つまり芸術作品から時代の精神状況の解明へと向かう発想法が分析される。『現在の宗教的状況』の第一部「科学と芸術の領域における現在の宗教的状況」では，科学，形而上学，そして芸術に現れた精

神状況が読み解かれるが，特にティリッヒの注目するのは，表現主義的絵画と共に実存主義的芸術の示す20世紀の精神状況である。ティリッヒによれば，20世紀の実存主義の特徴は，人間を本質存在と実存存在の二重性（両義性）において捉えるという人間理解の内に認められるが，ここから，両義性の状況への囚われの中からこの両義性を超えるものを追求するという人間の実存的欲求が顕わになる。表現主義や実存主義とは，この人間の精神的状況を反映しているのであり，有限性に安住する精神性と言われる「ブルジョワ精神」の内的超越の記録として評価されるのである。1945年に公表された『世界状況』では，第二次世界大戦終結に際した，世界の精神的，経済的，政治的状況の分析が試みられるが，ここでも，「ブルジョア社会」の発展段階などを分析するためにティリッヒが依拠するのは芸術作品であり，状況と芸術の相関性という洞察が，『現在の宗教的状況』から一貫したティリッヒの思考方法であることがわかる。

第五章「ロマン主義と現実主義」では，ティリッヒの芸術神学の基本的立場が，ロマン主義と現実主義の緊張における統合としての信仰的現実主義であることの解明が目指される。まず，ロマン主義は啓蒙主義的な普遍主義・合理主義へ対抗して，個人的自己の独自性を強調し，自然や芸術に無限なものの現れを直観する思想運動であるが，これは近代的な精神性の不可欠の構成要素であり，また表現主義的芸術の基盤の一つとして位置づけられるのである。これに対して，現実主義は，事柄そのものに向かい，現実的なものに注目しつつ，現実的なものについての最も真実で最も究極的な直観とは何かを問う。たとえば，歴史的現実主義は，現在性の意識，「いま・ここ」の意識の内に現実性を探究し，歴史のプロセスの中に真の現実性（実在性）を見いだそうとして，歴史の外部への飛躍や超越を拒否する。この歴史的現実主義は，精神における無限なるものとの関わりを志向するロマン主義とは対立せざるを得ない。しかし，ティリッヒは，広義の宗教性を有する創造的な芸術作品においては，その創造性の活力としてのロマン主義的態度と現実への志向性とは緊張において統合されていると主張する。このロマン主義と現実主義との緊張的な統合の立場こそが，ティリッヒの提唱する信仰的現実主義の核心点なのである。

以上の論述を受け，「結論」で確認されたのは，次の点である。

①ティリッヒによれば，文化の精神的深みにおいて「宗教性」（広義の宗教）を見いだすことによって，宗教と文化との対立は乗り越えられる。ここに芸術神学を構想する根拠があり，一見非宗教的に見える現代芸術における宗教性を論じることが可能になる。

②ティリッヒは，芸術こそが文化の精神的深み（精神状況）をもっとも意味深く表現するという洞察（芸術と時代状況の相関性）に基づいて，時代状況を論じている。これは，『大衆と精神』，『現代の宗教的状況』，『世界状況』という一連の論考の分析から確認された。

③ティリッヒの信仰的現実主義（ロマン主義と現実主義との緊張的統合）は，文化と宗教との分裂を克服しうる新しい芸術神学の形成にとって，きわめて示唆的である。このティリッヒの洞察を継承発展させることによって，文化の創造性を適切に捉えることができる宗教理論の構築が目指されねばならない。

論文審査の結果の要旨

パウル・ティリッヒ（Paul Tillich, 1886-1965）は20世紀を代表するキリスト教思想家の一人に数えられるが，その思想的特徴は，近代の世俗社会における宗教の積極的な意義を体系的な宗教論によって明らかにし，しかもそれを政治，経済，思想，芸術といった広範な諸問題に即して具体的に論じた点に認められる。本論文で論者は，こうした諸問題の中から，特に芸術の問題を取り上げて詳細な分析を行っているが，これはティリッヒ研究に新しい成果を付け加えただけでなく，現代の宗教思想一般における「宗教と芸術」の関係をめぐる議論の展開に，大きな貢献をなしたものと評価できる。

本論文の主要な成果は以下の点に認められる。

1．世俗社会の特徴として，宗教（教会）と文化（社会）との対立あるいは分裂の状況を挙げることができるが，ティリッヒがこの対立状況を克服するために提出した「文化の神学」は，近代以降の精神状況を適切に捉えうる宗教概念，つまり「広義の宗教」の理論的解明に基づいている。論者は，こうしたティリッヒの宗教概念を明確に分析しただけでなく，それがまさに芸術神学（芸術における宗教性の理解）を可能にしている点を，具体的な作品論を通して明解に説明している。ティリッヒの抽象度の高い理論の妥当性を具体的な芸術作品に即して論じた点に本論文の重要な成果を認めることができる。

2．ティリッヒはその生涯の中で繰り返し時代の精神状況を批判的に分析し，時代の諸問題と取り組んでいるが，この時代状況分析に対して芸術が重要なインスピレーションを与えていたことについては，従来のティリッヒ研究でも指摘されてきた。本論文は，こうしたティリッヒにおける「状況と芸術の相関性」の洞察を，『大衆と精神』，『現在の宗教的状況』，『世界状況』という三つの論考の厳密な読解に基づいて具体的に解明し，それによってティリッヒの思考方法を明らかにした点において，これまでのティリッヒ研究の水準を超える成果を示している。

3．ティリッヒの芸術神学は表現主義的芸術の宗教性を高く評価する点に特徴があるが，その一方では現実主義の立場から，表現主義の源の一つであるロマン主義的伝統に対する批判がなされている。論者は，この錯綜した議論の流れをティリッヒのロマン主義論の精密な分析に基づいて整理し，ティリッヒ自身のロマン主義批判にもかかわらず，ティリッヒの信仰的現実主義が，ロマン主義と現実主義との緊張的統合として解釈できる点を説得的に示した。これは，ティリッヒ研究にとっての重要な成果であるだけでなく，現代の宗教思想における芸術論に対しても大きな貢献といえよう。

4．論者は，これまで神学研究の中でのみ論じられがちであったティリッヒの芸術神学を，一般の美学や芸術理論との関連性をも念頭において論じており，今後のティリッヒの芸術神学についての研究に対して，新しい方向性を提示したものと評価できる。

以上の点で優れたティリッヒ研究と評価できる本論文にも，いくつかの問題点あるいは欠点が見いだされる。たとえば，論者の努力にもかかわらず，内実，精神，内的超越といった芸術神学の基本概念の解明にはなおも不満な点が残った。この理由の一つとしては，論者がティリッヒの用いる諸概念を分析する際に，ティリッヒの芸術論の背後にある哲学思想（シェリング，ヘーゲルなど）や同時代の美学・芸術理論との関連性にまで十分に踏み込んだ解明がなされていない点を指摘しなければならない。また，ティリッヒ研究における二次的文献もさらに手を広げて参照すべきであった。引用の不正確，誤訳も散見される。

しかしこれらの問題点は，論者が本論文で示した高い能力をもってすれば今後克服可能なものであり，本論文がティリッヒ研究として学界に独創的な貢献をなしたことを否定するものではない。

以上，審査したところにより，本論文は博士（文学）の学位論文として，十分価値あるものと認められる。2005年2月24日，調査委員3名が論文内容とそれに関連した事柄について試問した結果，合格と認めた。